

「島よ」その2

尾崎 徹

さて「島よ」の音楽である。

途切れることなく劇的に物語が進み、全ての感情、喜怒哀楽を伴った起伏と平穏が交錯する展開は、まさしく脂が乗り切った当時 45 才の大中恩氏の真骨頂。(現在御歳 93 才の現役作曲家)

ピアノの荘重な前奏 (prologue) のあと、物語の全容を暗示するようなアルトパートソロに続き、八声が曲の題名を重ねていく大胆な構成は、1970 年当時の合唱界においてセンセーショナルな話題をさらったことだろう。

曲全体の構成は、終止で区切ると後奏 (epilogue) を加えて全部で7つの部分から成り立っている。終止は文章で言えば句点のようなものであり、曲間を開けず、むしろ畳みかけるようなストーリー展開を求めている。

また、作曲手法においては、上行音型の『ド・レ・ミ(ミ♭)』或いは下降音型の『ミ(ミ♭)・レ・ド』以外のモチーフを特定していない。動きたくても動けない「島」の気持ちを、自由自在にうねる大胆な展開で代弁している。

一方で、速度や拍子についてはIVを中心にシンメトリーな明確なロジックを貫いているのである。

- I. (P3) Lento
- II. (P8) Moderato [三拍子]
- III. (P20) Adagio
- IV. (P33) Allegro (moderato) ← 中心
- V. (P46) Adagio
- VI. (P53) Moderato [三拍子]
- epilogue (P58) Lento

このように論理的な構成でありながら、この曲はなぜ人の感情を揺さぶるのだろうか。

まずは、ソプラノに主旋律を置きがちな作曲手法を用いず、全てのパートにスポットをあてて、如何にも歌い甲斐あるフレーズを各パートに振り分けていることが大きい。歌う側それぞれがこの物語の主人公なり代弁者となって、ストーリーを引っ張る立役者になれるのだ。それから、躍動する旋律が心地よい。五度や六度の飛躍する上行音型は希望や励ましの感情に通じており、容易に感情移入できるのである。

そして何よりも「島よ」が私たち自身を指していること…。「島」を孤独感をあらわす比喻として歌っていると、いつしか自分にすり変わる構成によって、私たちは悲哀とともに、愛着の情を感じずにはいられないのである。